

お近くのJICA窓口

JICA海外協力隊や国際協力に興味のある方、開発途上国の現状を知りたい方、企業・団体、個人問わずご相談を受け付けておりますので、お気軽にお近くのJICA窓口までお問い合わせください。

自治体、民間企業、学校関係者の方

- 職員をJICA海外協力隊として派遣してみたい
- JICA海外協力隊経験者を採用したい
- 児童や生徒にJICA海外協力隊の体験談を聞かせたい

JICA海外協力隊に興味がある個人の方

- JICA海外協力隊経験者と話ししてみたい
- 制度やJICAの支援体制を聞いてみたい
- 自分も参加できるか相談したい
- 国際協力や開発途上国についてお話を聞きたい



青森デスク

〒030-0803 青森県青森市安方1-1-40
青森県観光物産館アスパム2F
(公財)青森県国際交流協会内
Tel: 080-3140-2129
E-mail: jicadpd-desk-aomoriken@jica.go.jp

岩手デスク

〒020-0045 岩手県盛岡市盛岡駅西通1-7-1
いわて県民情報交流センター5F 国際交流センター内
Tel: 080-2809-5540
E-mail: jicadpd-desk-iwateken@jica.go.jp

JICA東北

〒980-0811 宮城県仙台市青葉区一番町4-6-1
仙台第一生命タワービルディング20F
Tel: 022-223-4772
E-mail: jicathic-jv@jica.go.jp

秋田デスク

〒010-0001 秋田県秋田市中通2-3-8
秋田総合生活文化会館(アトリオン)1F
(公財)秋田県国際交流協会内
Tel: 080-2809-5541
E-mail: jicadpd-desk-akitaken@jica.go.jp

山形デスク

〒990-8580 山形県山形市城南町1-1-1
霞城セントラル2F(公財)山形県国際交流協会内
Tel: 080-2809-5542
E-mail: jicadpd-desk-yamagataken@jica.go.jp

福島デスク

〒960-8103 福島県福島市舟場2-1
(公財)福島県国際交流協会
Tel: 080-2809-5543
E-mail: jica_fukushima_desk@jica.go.jp

JICA二本松(二本松青年海外協力隊訓練所)

〒964-8558 福島県二本松市永田字長坂4-2
Tel: 0243-24-3200
E-mail: jicanjv-bk@jica.go.jp



世界を元気にした人は、日本も元気にできる

日本も元気にする JICA海外協力隊

Japan Overseas Cooperation
Volunteers Stories
— 東北編 —





日本も元気にする JICA 海外協力隊

2025年で60周年を迎えたJICAボランティア事業。通算で約5万7000人のJICA海外協力隊が、世界各国で現地の人々と共に課題解決に向け取り組んできました。その経験は、帰国後も日本をより元気にする原動力となり、日本の課題を解決する力としても活かされています。本誌では、協力隊として培った経験を活かし、帰国後地域へ根差し、東北地域から東北を、日本を、世界を、元気にする方々をご紹介します。

青森	石山 紗希さん [派遣国:ガボン]	03
秋田	加藤 マリさん [派遣国:ケニア]	05
岩手	金野 利哉さん [派遣国:フィリピン]	07
山形	佐久間 麻都香さん [派遣国:ブルキナファソ]	09
宮城	箱崎 舞さん [派遣国:チリ]	11
福島	高橋 司さん [派遣国:メキシコ]	13
	JICA 海外協力隊グローバルプログラム	15
	JICA 海外協力隊について	17
	協力隊経験者を応援するJICAの取り組み	18

JICA TOHOKU
01
石山 紗希
SAKI ISHIYAMA



チャレンジする人と
地域や地場産業をつなぎ
青森を盛り上げたい

ゼロからの活動を支えた
人とのつながり

石山紗希さんがJICA海外協力隊を志したのは大学時代。海外生活への好奇心に協力隊経験者との出会いが重なった。しかし卒業後、野菜栽培隊員としてガボンに赴任すると、思い描いていた「農家と協力して農業を活性化する」という活動イメージは覆される。「ガボンは地理や気候条件から農業が盛んでなく、農産物は輸入頼り。『コメは土の中でできる』と思っている子どももいるほどで、まずは農作物を自給することがなぜ大切かを理解してもらうことから活動を始めなくてはなりませんでした」

配属先の農業局では、仕事をしない同僚の存在にも頭を抱えた。悩んだ末、相手を理解するため同じ生活をするに。「職場から出ていく同僚についていたら昼間からお酒を飲んでいて。笑 あげんとしましたが、とにかく一緒に過ごすようにしました」



現地での活動 ガボン

GABON

そのうちに、町の人と話す機会も増えていった。すると石山さんが語る農業の重要性に共感する人たちが現れ始めた。以降、家庭菜園のサポートや、食育を目的とした学校菜園、病院での農業アクティビティなど、小さくともたしかな活動で地域に農業の輪を広げていった。一方、問題の同僚の勤務態度は変わらず。しかし「最後は諦めました」と話す石山さんは笑顔だ。「多様な価値観に触れ、他者の思考や行動に対する許容範囲が広がった」との言葉に、ガボンで身に付けた頼もしさと優しさがにじむ。

帰国後の活動 青森県弘前市

AOMORI

海外志向から地元志向へ
弘前で育む挑戦の種

協力隊での2年間は、故郷への思いも大きく変えた。47名の民族が暮らし、一人ひとりが確固たる民族意識を持つガボン。自分のアイデンティティーを意識せざるを得ない環境で、青森のことを考えた。「地元には『短命県、仕事がない』などネガティブなイメージもありましたが、それは外から無意識に植え付けられたものではないか?と考えるようになってきた。ガボンというマイナーな国にも多くの魅力があり、自分が暮らす場所のために前向きに行動する人たちがいる。青森も同じかもしれない。そう思ったら、私が青森を盛り上げなければ!と謎の使命感が湧いてきたんです」

現在は、弘前を拠点に地域コーディネーターとして活躍する石山さん。起業を目指す移住者や関係人口を増やす取り組みの軸には、「主体的に人生を切り開く人を増やし、青森をたくさんのチャレンジが生まれる地域にしたい」との思いがある。「立派な建物を作っても、場や仕組みを整えても、人がいなければ何も始まりません。大切なのは、使命感を持って何かをやりようとする人が真ん中にいること。途上国支援も日本のまちづくりも本質は同じだと感じます」。活動の拠点となる複合施設『HIROSAKI ORANDO』には、移住者、地元住民、旅行者とさまざまな人が集まる。誰にでも開かれた温かな空間で、今日も新たな挑戦の種が育っている。

居心地のよい空間について長居してしまう『HIROSAKI ORANDO』のカフェスペース。



1 学校菜園で育てた野菜を子どもたちと収穫。



2 3 住民と同僚と。すっかり町の一員になった石山さんの帰国時には、「さみしい」と泣いてくれた友人も。

Voice

株式会社ORANDO PLUS
小西 伶奈さん



石山さんは異なる価値観への許容力がずばぬけて高い方で、それはガボンでの経験で培われたものなのだろうと感じます。インターン生だった大学生の私の意見も尊重してくれ、企画したイベントを開催させてもらったこともありました。社員となった今も、自分のやりたいことに挑戦できる環境に心から感謝しています。今後も石山さんの描くまちづくりに私のアイデアも掛け合わせて、弘前をさらに魅力的な場所にしていけたらうれしいです。



小さな複合施設『HIROSAKI ORANDO』。カフェやギャラリー、ゲストハウスを備え、イベントや宿泊にも利用できる。

協力隊での経験が
今の自分の礎に

Message

地域の人とのコミュニケーションや、ニーズの把握、ぶれない軸を持つこと、主体的に動くことなど、協力隊での経験は、今の私の生き方、考え方、仕事の仕方、すべての礎になっています。さまざまなことがあった2年間でしたが、心から参加してよかったと言えます。もし迷っているならぜひ参加してみてください!

Profile

石山 紗希

株式会社ORANDO PLUS 代表取締役

[派遣国]ガボン

[職種(活動分野)]野菜栽培

弘前で大学時代を過ごし、卒業後、協力隊に参加。帰国後、起業家育成などを手がける東京のNPO法人で経験を積んだのち青森にUターン。地域の課題解決や産業創出に取り組む『Next Commons Lab』の委託を受け、移住者や関係人口を増やす取り組みや、交流拠点となる複合施設『HIROSAKI ORANDO』の設立・運営を手がける。2022年にはコーディネーター会社『株式会社ORANDO PLUS』を創業した。

HIROSAKI ORAND HP: hirosakiorando.com

※所属部署・役職名は取材当時のものです。

JICA TOHOKU
02
加藤 マリ
MARI KATO



ケニアで出会った 「あるものを生かす農業」で 地域の未来をつくりたい

現地での活動 ケニア

KENYA



見過ごされている価値を 再発見し伝える活動

貧困などの課題を抱えながらも、あふれんばかりのエネルギーを感じさせるアフリカにかねてから興味があった加藤マリさん。大学時代にHIV/エイズに関する啓発活動を行うNGOに参加していた経験をもとに、エイズ対策隊員としてケニアに渡った。

現地ではエイズ問題とその根源にある種々の社会問題に焦点をあて、性教育や栄養指導、収入向上活動と幅広い取り組みを展開。その一つがケニアのローカル野菜「モリンガ」の植樹・普及だ。モリンガは世界が注目するスーパーフードだが、現地住民の認識は単なる野菜。加藤さんの活動が、その価値に気づかせた。「外から来た私が『モリンガってすごいんだよ』と伝えることで関心を持ち、栽培する人が増えていきました。現地の人には、身近で安価な“その土地にあるもの”が最も受け入れやすかったのです」

地域社会に飛び込み活動するうち、支援対象という感覚だったケニアの人たちは「自分と同じく毎日を普通に必死に生きる友人」へと変わっていった。活動を通じて出会った農家からは、人生の指針を得た。「生きるうえで最も重要な『食』を自分たちが支えている、という誇りを持って働く姿がカッコよくて。私も帰国したら地元・秋田で農業をしようと決めました」

帰国後の活動 秋田県仙北市

AKITA

秋田はサイコーな場所! その魅力を多くの人に伝えたい

帰国後、全くの未経験から農業を学び、野菜の自然栽培に取り組み始めた。しかし、どの野菜もすぐに枯れてしまう。そんな中、大根だけが辛うじて実をつけた。唯一生き残った、この土地に合うたけまじい野菜。まさに“ここにあるもの”だ。同時に、地元にあるもの、文化、人材を生かすことを考えた末、たどり着いたのが秋田名物の大根漬け『いぶりがっこ』。作り方を教えてくれた近隣のおばあちゃんたちを、加藤さんは師匠と慕う。「極寒の中での重労働をものともせず、その年その年おいしいものを作ろうと研究を重ねる姿にはプライドを感じます。ケニアと同じく秋田にも、カッコいい生き様を見せてくれる人たちがいました」

現在、加藤さんが営む『三吉農園』では、いぶりがっこの製造や地元野菜を使った商品開発のほか、首都圏のイベント出店にも力を入れる。師匠のいぶりがっこなども受託販売し、地元の多様な食文化を発信している。「おいしい食べ物があり、きれいな風景があり、魅力的な人がいる秋田は、サイコーな場所」と加藤さん。そのポテンシャルを生かしていくことが今後の目標だ。“あるものを生かす”取り組みは、ケニアから秋田へと場所を変えた今も、地域を輝かせる原動力となっている。



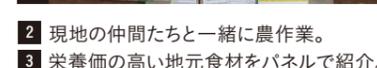
自然栽培の大根で作る、三吉農園自慢のいぶりがっこ。



1 子供たちを対象にしたHIV/エイズの授業。



2 現地の仲間たちと一緒に農作業。



3 栄養価の高い地元食材をパネルで紹介。

Voice

三吉農園
加藤 文乃さん



妹のマリは小さい頃から常にマイペース。「協力隊に行く!農業を始める!」と突然の宣言に驚かされっぱなしです。見守るつむりの家族もいつしか巻き込まれ、今では野菜の栽培から商品販売、民宿の運営まで一家総出で行っています。周囲を巻き込む力もマリの持ち味。これからも秋田を盛り上げていけるよう、マイペースに、たまには姉を労わりながら走り続けてくれたらと思います。笑



我が子のような大根を一本一本丁寧に洗う加藤さん。毎年約5トンの大根をいぶりがっこに加工する。

協力隊の醍醐味は
小さな変化を起こすこと

Message

世界を変える仕事というイメージもある協力隊ですが、そんなに大それたことではないと思っています。例えば、植樹した1本のモリンガが数十年後に誰かの健康を支えるように、小さくてもいつか何かにつながる変化を起こすことが協力隊の醍醐味ではないでしょうか。自分の中にも必ず変化が生まれます。目の前の一人ひとりを大切に、一步一步進んだ先に活動の答えがあるはず。気になるならぜひ挑戦を!

Profile

加藤 マリ

三吉農園 園主
[派遣国]ケニア

[職種(活動分野)]エイズ対策

大学卒業後、1年間アルペンスキー選手として活動したのち、協力隊に参加。帰国後、農業研修を経て地元・秋田で営農をスタート。『三吉農園』を立ち上げ、家族とともに野菜の自然栽培や、いぶりがっこをはじめとする加工食品の製造・販売を行う。農家民宿『Hotel Radish House』では季節ごとの農業を体験できる。

三吉農園 HP: sankichi-farm.com

※所属部署・役職名は取材当時のものです。

JICA TOHOKU
03
金野 利哉
TOSHIYA KONNO



日本から世界へ！
テクノロジーの力で
命を守り、未来を変える

現地での活動 フィリピン

PHILIPPINES



救急隊改革を目指すも無念の帰国 悔しさをバネに新たな道へ

元消防士・救命救急士という経歴を持つ金野利哉さん。原点には、中学卒業目前に地元岩手で経験した東日本大震災がある。「変わり果てた沿岸部の光景に衝撃を受け、そこで活動する各国の救助隊のように、自分も世界の人役に立てる人間になりたいと思ったのです」

その思いを胸に、消防署勤務を経てJICA海外協力隊に参加したのは2020年のこと。防災・災害対策隊員として派遣されたフィリピンで、現地の救命救急活動に同行して驚いた。ハイエースにベッドを積んだだけの救急車。スキルも知識も持たない救急隊員たち。ある時、川で溺れた14歳の子どもが搬送中に亡くなった。隊員は心肺蘇生の方法すら身に付けていなかった。このままでは救える命も救えない。まずは救急隊の訓練を習慣化しようと決意した。その

直後、コロナ禍に突入。協力隊活動はわずか3ヶ月で幕を閉じた。

「本当に悔しかったですね。同時に、このままでいいのか？という思いが湧いてきて、日本にいながら世界のために何ができるかと考え続けました」。そこでたどり着いたのが、アプリケーション開発だ。実は子どもの頃からコンピューターが大好きだった金野さん。「ITで命の尊さを守る」という新たな挑戦が始まった。

帰国後の活動 岩手県八幡平市

IWATE

ITで地域の生活の質を高めたい これからも灯し続ける情熱の火

帰国後、地方創生の一環としてIT起業家育成を推進する岩手県八幡平市の取り組みを知った金野さんは、同市でプログラミングを学ぶとそのまま移住。「自然に囲まれたのどかな土地に、国内外からIT関連の人材や企業が集まってくるのが面白いところ」と八幡平の魅力語る。市の起業支援やJICAを通じた人脈にも支えられ、2023年には事業を法人化。クマ対策や高齢者の見守りなど、地域課題に応えるアプリを次々リリースし、「ITで持続可能な仕組みを作り、地域の生活の質を向上させたい。場所を選ばずやりたいことを実現できるITのメリットは、若者にとって魅力的な雇用を生むことにもつながるはず」と未来を見据える。

現在力を入れるのは、急患の病状をAI分析し、救急車内での処置をサポートするアプリ『ベッドサイドヒーロー』の実用化だ。人材育成のための訓練モードも搭載した革新的なアプリは、フィリピンなどの途上国のみならず、高齢化や医療人材不足に悩む日本の地域社会での活用も期待される。2024年には、協力隊経験者の起業を支援するJICAの新プロジェクト『BLUE』に参加した金野さん。事業計画の精度を高めたほか、同じ志を持つ仲間にも出会えた。「協力隊に行かなければ今の自分はありません。任地で何もできなかった悔しさから今に至るので、今後もこの情熱を絶やさず事業を進めていきます」。北東北の小さな町は今、新しい未来を創造するパワーに満ちている。



多彩なIT人材が集まるシェアオフィス『Startup Core』が金野さんの活動拠点。



1 現地で救命活動にあたる金野さん。



2 配属先の仲間たち。協力隊の活動期間はわずかだったが、現在もフィリピンでの『ベッドサイドヒーロー』導入を目指すパートナーとして交流が続く。

Voice

八幡平市 企業立地推進係長
中軽米 真人さん



金野さんと出会った時、いい意味で後先を考えない行動力と「きつとうまくいく!」という根拠のない自信に起業家の素質を感じました。高齢化や人口減は今後多くの国が直面する課題であり、金野さんのビジネスの舞台も八幡平から世界へと広がりつつあります。地方創生において最も重要な“地域に仕事をつくれるプレーヤー”としても期待しています。事業を大きく成長させ、いつかは次の起業家の卵を支援するような存在になってくれたらうれしいですね。



Apple WatchとiPhoneで家族の健康状態などを確認できる『みまもりサービスHachi』は高齢化社会の心強い味方。

協力隊は自分自身を見つめ直すチャンス

Message

協力隊は単なるボランティアではなく、自分がどう生きたいか、何を大切にしたいかを深く考え、自分自身を見つめ直す大きなチャンスです。困難に直面することもあると思いますが、それ以上に大きなものを得られるので、ぜひ勇気を持って一歩を踏み出してください。その経験が必ず次のステップにつながります。

Profile

金野 利哉

Golden Field株式会社 代表取締役

[派遣国]フィリピン

[職種(活動分野)]防災・災害対策

高校卒業後、専門学校で救命救急士資格を取得。消防署勤務を経て協力隊に参加。帰国後、岩手県八幡平市の『起業家志民プロジェクト』を通じてプログラミングを学び、2023年に救急・医療・防災のアプリ開発やDXコンサルティングを手がける『Golden Field株式会社』を設立。2023年度の起業家万博東北地区大会(総務省主催)では最高賞を受賞し、全国大会に進出した。

Golden Field株式会社 HP:golden-f.com

※所属部署・役職名は取材当時のものです。

JICA TOHOKU
04
佐久間 麻都香
MADOKA SAKUMA



庄内柿の
エネルギーで
人にも、地域にも、活力を。

現地での活動 ブルキナファソ

BURKINA FASO

農業の役割を再認識した
刺激的な日々

幼い頃から祖父母の畑で遊び、自然や動物が大好きだったという佐久間麻都香さんは、山形大学農学部を卒業するタイミングで、JICA海外協力隊に応募した。「もともと海外に興味はありましたが、教授に影響を受け、『海外』と『農業』というキーワードに強く惹かれて。卒業を機に、行くなら今だ、と思い応募しました」

食用作物・稲作栽培の隊員として派遣されたのは、西アフリカ。アフリカと日本の稲を交配させたネリカ米の普及を目的に、現地の職業訓練校で生徒に栽培方法を教え、展示圃場の管理を担った。現地には灌がい設備がなく、ため池から溢れた水をそのまま活用するため、大雨によって田んぼが水没し収穫不能になった年も。「現地ではあわやきびなどの雑穀栽培が主。どの家庭でも家の周囲にあまるところなく雑穀を植えていて、収穫できなければ



命に関わるという緊張感がありました。『農業=生きるための大切な活動』というシンプルで本質的な役割を再認識でき、帰国後の行動が変わりました」

電気が通らない、水が出ないなどのトラブルは日常茶飯事。「毎日がサバイバルでした」と佐久間さんは笑う。アレルギー症状やマラリアを疑うほどの高熱など、体調を崩し心細い思いもしたが、心配し助けてくれる同僚や友人たちとの絆は深まった。「協力隊の経験によって友人が一気に増えて、私の世界は大きく広がりました」

帰国後の活動 山形県鶴岡市

YAMAGATA

地域の農業と特産品を守り
新しい価値を世界に届けたい

帰国後は大学院へ進学した佐久間さん。修士課程修了後には、農業研修生として一から農業を学んだ。「海外で農業を教えたことがあっても日本の農業を知らなかったのが、実際に体験したかったんです」

農学部があり生活の拠点でもある鶴岡市は、種なして甘みたっぷりの庄内柿の産地として知られている。高齢化が進む生産者にとっては工程が多く、収益も見合わない。佐久間さんは、とある縁で預かった庄内柿の畑を守るため、起業塾に通い仲間を増やしたりアイデアを磨いたりして、柿の葉茶の製造・販売を始めた。

そんな時、「出羽三山で山伏修行をした人が、地元食材でエナジーバーを作りたいと言っている」と、知人から紹介されたのは、のちにビジネスパートナーとなるデイビット。「庄内柿を活かせるかも」と、ともに開発を進めた。生の柿では水分が多いため、干し柿を使って完成させたのは、地元産で添加物不使用のエナジーバー。佐久間さんは、地域に対して「とにかく感謝の気持ちしかないです。出羽三山の精神文化をコンセプトに取り入れ、地域産品を使って『SHONAI SPECIAL』ができました。さらに発展させていきたいですし、この商品が、鶴岡や山形を知ってもらうきっかけになれば嬉しいです」と語る。干し柿を使ったエナジーバーにはファンも多く、今や販売網は海外まで広がっている。



干し柿の中でも硬いからという理由で処分されていたはじきと呼ばれる柿を使うことで、SDGsに貢献する。



1 野原同然の現地の圃場でお米を栽培し普及を目指した。



2 仲良くなるには笑顔が一番。
3 現地の人たちともすぐに打ち解け、当たり前ではない状況も自分なりに楽しんだ。

Voice

鶴岡ナリワイプロジェクト代表
井東 敬子さん



麻都香は、いつもにこにこしているのでふわっとしているように見えますが、とても芯が太く、周囲が自然に手を貸してしまう「助けられビティ」という能力を持っています。笑 主宰する『鶴岡ナリワイプロジェクト』に彼女が参加し、庄内柿の事業化を目指してトライ＆エラーの連続でしたが、諦めずにエナジーバーを生み出し、今や地域産業を支える立場となりました。成長し続ける姿は頼もしい限りです。



手軽にエネルギー補給ができる高カロリー食品のエナジーバーは、近年はアウトドア愛好家にとどまらず自然食を好む人々にも人気。『SHONAI SPECIAL』は10種類を販売中。

与えに行くと思いがちですが…
全く逆になります

Message

「協力隊に挑戦してみたい」と一瞬でも思うなら、きっとあなたにとって挑戦するタイミングなのだと思います。協力隊は、海外に「与えに行く」と思いがちですが、実は全く逆で与えられることの方が何倍も多いです。社会人経験のない方は自信がない人もいかもしれませんが、意外と日本の社会的な常識を期待していない方が現地には順応しやすいかもしれません。笑

Profile

佐久間 麻都香

1Blue(ワンブルー) 株式会社 役員

[派遣国]ブルキナファソ

[職種(活動分野)]食用作物・稲作栽培

山形大学農学部卒業後、協力隊に参加し、帰国後は大学院に進学し修士課程中にはJICA短期ボランティアにも参加。修了後は、鶴岡市内での農業研修を経験。庄内柿の干し柿の中でも硬くて食べられないと捨てられていた「はじき」を主原料にして100%植物由来の鶴岡産エナジーバーを製造・販売。ほかにも鶴岡観光案内所のスタッフや一般社団法人Sukedachi Creative庄内の理事を務める。
SHONAI SPECIAL HP: shonaispecial.jp

※所属部署・役職名は取材当時のものです。



JICA TOHOKU
05
箱崎 舞
MAI HAKOZAKI

小さな海の町・七ヶ浜産の オリジナルワインで 多くの人に笑顔と団欒を届けたい

言葉が通じないなら行動あるのみ! 周囲を巻き込む精力的な活動

「海外で働きたい——」海外旅行を経て抱いた漠然とした思いを行動に移したきっかけは、「あなたみたいな子は海外に行った方がいい」と、りんご生産者でありJICAの専門家としてアルゼンチンでの活動経験がある叔父母が背中を押してくれたから。

環境教育隊員として派遣された南米・チリ。ペラリージョという小さな村の村役場に環境委員会を設置し、村の全ての小・中・高校で環境教育授業を実施。ごみのポイ捨てを減らすため、人が集まる場所にゴミ箱や灰皿を設置し、植樹やごみ拾いのクリーン運動を行った。1年目に苦労したのは言葉の壁。もどかしくなることもあったが、子どもたちが「マイが言いたいのはこういうこと」と代弁してはよく助けてくれた。2年目は計画通りに進まないことの多さに氣勢をそがれた。それでも、チリの温かな空気感やゆったり



と時間が流れる農村部で過ごすうちに、「まあいいか」と次第に受け入れられるように。「言葉で伝えられないなら行動で示そう」とどんな時も主体的に動いたことで、「マイは自分では言わないけれど熱心に活動している」と行動力が評価された。持ち前のパワフルさで周囲を巻き込み、次第に活動をサポートし認めてくれる人たちが増え、「2年間で家族と呼べるほど親しい、多くの友達や仲間ができました」と箱崎さんは嬉しそうに笑う。

現地での活動 チリ
CHILE

帰国後の活動 宮城県七ヶ浜町

MIYAGI

海の町にワイナリー新設へ これからも挑戦し続ける

派遣先のチリの小さな村にはワイナリーが15軒もあり、町の人はいつもワインを囲み、会話や団欒をゆったりと楽しんでいた。そこに流れる時間、寛容な人々、美味しいチリワインが大好きになった箱崎さんは、派遣終了後に現地の日系企業に就職。さらに6年ほどをチリで過ごし、休日は郊外のワイナリーを巡り、ワインスクールにも通ってワインの知識を深めた。

帰国後は地元の七ヶ浜町で、惚れ込んだチリワインの輸入業をスタート。日本では安価なイメージのチリ産ワインの中でも、栽培方法や醸造にこだわったプレミアムワインを専門に扱う。「高いチリワインは売れない」という心配の声を背に、取引先はあつという間に増え、自信も深まった。「ここで過ごすうちにワインを売るだけではなく、七ヶ浜産のワインを造りたくなって。ワイナリーがあれば、人が集まり、この地の食や自然をもっと楽しんでもらえると思うから。もっと笑顔を増やしたいです」と、箱崎さん。資金調達の審査には5回目でやっと採択された。「なんとかやるまでです」と笑う彼女の不屈のマインドと行動力は、七ヶ浜でも支援者を増やし、今まさに新たな夢をも叶えようとしている。



青いラベルの『ブルソ』は女性醸造家が造る評価の高い一本。



1 小学生と交流しながら植樹活動。



2 3 学生たちとゴミ拾いやクリーン活動と一緒にいった。

Voice



ブエンモスト株式会社
専務・営業戦略部長
佐藤 善亮さん

大手ワイン卸会社に勤めていた前職時代、「今後はこういう本物を扱うワイン商しか生き残れないよ」と懇意のシェフに見せられたのが箱崎の扱う商品でした。現地でも1、2%しかない本物のチリワインを扱っていて正直驚きました。すぐに会社を退職し、ブエンモストの仕事を手伝うようになったのですが、プライベートでもパートナーとなった今、彼女のバイタリティと諦めない心には、本当に感じます。そしていつの間にか巻き込まれています。笑



公私ともに支え合うパートナーのお二人。猫のジョナちゃん、柴犬の柴山くんはワイナリーの看板猫&看板犬。

経験したすべてが
人生の宝物に

Message

協力隊に参加するか迷っている方には、ぜひ参加して欲しいです。現地ではうまくいかないことも、苦勞もたくさんありますが、経験したすべてが自分の人生の宝物になります。私は60歳までに、ぜひもう一度参加したいと思っています。

Profile

箱崎 舞

ブエンモスト株式会社(七ヶ浜ワイナリー) 代表取締役
[派遣国]チリ

[職種(活動分野)]環境教育

社会人経験ののち海外協力隊に参加。派遣先のチリが気に入り、派遣終了後も現地の日系企業に勤めた。帰国後は『ブエンモスト株式会社』を設立し、チリワインの輸入業を開始。こだわりのある小規模ワイナリーと契約し、日本の飲食店などに上質なプレミアムチリワインを届けている。現在は、七ヶ浜ワイナリーの立ち上げに奔走中。シードルやロゼワイン、白ワインを中心に25年1月より醸造がスタート。ブエンモスト株式会社 HP: buenmosto.myshopify.com

※所属部署・役職名は取材当時のものです。

JICA TOHOKU
06
高橋 司
TSUKASA TAKAHASHI



園長として
地域の子どもたちと
ともに生きていく

現地での活動 メキシコ

MEXICO



路上で暮らす子どもたちの
幸せとは何か、考える日々

「満たされた生活から抜け出して、何ができるかゼロから挑戦してみたかった」とJICA海外協力隊に参加を決めた高橋司さん。

派遣先はメキシコの首都、メキシコシティ。「協力隊の派遣先って郊外ののどかな村というイメージありませんか？メキシコシティがあまりにも巨大都市なので正直戸惑いました」と振り返る高橋さん。現地ではストリートチルドレンの社会復帰を支援するNGOに所属し、自立生活や教育を支援するデイケアセンターに子どもたちを勧誘する活動を行った。毎日街に出て、路上生活の子どもたちに声を掛けて回る。手本も人脈もない中で体当たりの活動。情熱を注いで対話してもあっさりと言葉が破られ、落胆することも少なくなかった。それでも同僚とともに目標を共有し、路上で暮らす子どもたちに、足りない物を与えるだけでなく、物を得るための

方法を教えることに注力。「そんな危険なところまで行かないで」というJICAの担当調整員と言ひ合いになるほど、活動にのめり込んだ。「司じゃないとだめなんだ」と声をかけてもらえるようになり、活動はさらに熱を帯びた。「寝る前に『今日も生きていられた』と自分の生を意識したのは初めてでした。生まれた時から平等でない世界があることを痛感し、価値観が大きく変わりました」

帰国後の活動 福島県相馬市

FUKUSHIMA

自分の経験のすべてを
地域に還元したい

風光明媚で豊かな海の恵みをもらす松川浦を臨む原釜地域。この地に曾祖父が幼稚園を創立してから70年以上、高橋家は地域の子どもたちを園で預かり、大切に育ててきた。協力隊帰国後は地元に戻り、幼稚園教諭として園をサポートしてきた高橋さん。活動中に会ったメキシコ出身の妻と結婚し、地元での暮らしに本腰を入れようとしていた矢先に東日本大震災が起こった。多くの困難を乗り越え、さまざまな決断を経て、昨年より園長として園を牽引する立場に。

「私は、中学・高校は仙台へ、大学は関西に進学したため、なんとなく地元との繋がりが希薄で『どうして自分はここに生まれたのだろう』と、心の中にずっと居心地の悪さを感じていました」と、高橋さん。協力隊を経て日々の当たり前を大切にできるようになり、さらに震災復興の歩みの中で、この地が唯一無二であることを強く意識するようになった。地域に古くから伝わる獅子神楽保存会や命を守るライフセーバーの活動を始めてからは、さらに原釜への思いに変化が。「『ここがいい』と感じるようになりました。幼児教育者として、子どもたちとここで生活することが、私のすべての経験を地域に還元する活動だと思っています。変化する時代の中で、人として大切な道徳や価値観を子どもたちに伝えていきたい」と話す高橋さんが、子どもたちに向ける眼差しは温かい。



園のシンボルマークは、優雅に泳ぐ大きなクジラ。



1 施設で日本祭りを開催。



2 活動が評価され地元新聞に取り上げられたことも。
3 路上で生活する子どもたちに声をかけて回った。

Voice

くじらくらぶ・会長
岩佐 貴哲さん



自宅は幼稚園から車で15分ほど離れた場所にあります。園の理念に深く共感し、子どもを通わせています。『くじらくらぶ』は園児の父親で構成された保護者会で、園で必要な力仕事を任せられたり、海遊びのサップや子ども食堂など自由参加のイベントを主催したりしています。実は園長とは自分に子どもが生まれる前からの友人。熱い男で、だめなものはダメとメリハリもしっかりつけてくれる。子どもと対等に話し、よく見てくれています。行動力や地域への姿勢は、人として勉強になりますね。



いっぱい遊んで、いっぱい体をうごかす」が教育方針。遊びや自然体験を通して心を育てます。

Message

世界の大きさと小ささを
知るきっかけになるかも

まずは挑戦してみたいです。私は3回目のチャレンジで受かりました。毎日が満たされすぎて感謝することさえ忘れていた参加前から、今日あることの当たり前を大切にできるようになりました。世界中に派遣された同期との出会いも貴重です。世界が近くなりますし、視野も広くなり、さまざまな出来事を自分事としてとらえられるようになりました。

Profile

高橋 司

学校法人原釜学園 原釜幼稚園 園長

[派遣国]メキシコ

[職種(活動分野)]青少年活動

大学卒業後、協力隊に参加し、帰国後は幼稚園教諭として父親が園長を務める原釜幼稚園で幼児教育に従事し、2023年度からは園長に就任。JLA福島県ライフセイビング協会理事。公認ライフセーバー、ジュニアリーダー、BLS指導員。原釜敬神部として地域に伝わる獅子神楽の演舞や盆踊りなどの地域行事の運営を担う。

※所属部署・役職名は取材当時のものです。

JICA海外協力隊 グローバルプログラム

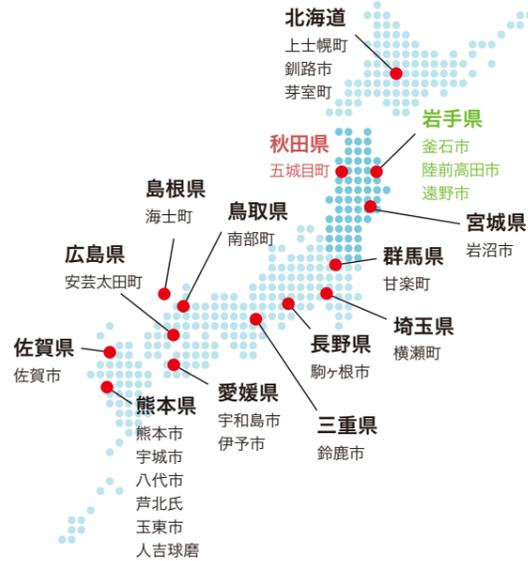
JICAは派遣前訓練の一環として自治体等が実施する地域活性化、地方創生等の取組みにOJTとして参加する『JICA海外協力隊グローバルプログラム』を全国で展開しています。東北地方では現在、岩手県釜石市、陸前高田市、遠野市、秋田県五城目町が受入れを実施しています。また、プログラム終了後も派遣中に赴任国からオンライン交流の実施、帰国後も地域と関係を継続し、地域の活性化を推進する人材となるべく支援しています。



主なプログラム実施先等の
詳細はこちら



東日本大震災を通じ、「復興支援」から
「国際協力」へと発展した地域連携



Message JICA東北から

JICA海外協力隊の「繋げる力」を活かす
開発途上国を舞台に活動するJICA海外協力隊は、まさに世界の
人々と日本人の絆を結ぶ「グローバル人材」。協力隊員が派遣
前に東北地域のパートナーと共に地域活性化のお手伝いをして、
絆づくりに励んでいます。東北で培った課題解決力や地域と共創
する力を派遣国での活動に役立てつつ、協力隊派遣後も派遣前に
培った絆をもとにさらに地域活性化に貢献されることを期待して
います。

日本も世界も元気にする東北人！熊本経由、海外へ！

人生における第2ステージ！

60歳で海外協力隊へとキャリアチェンジした私は、ここ熊本県玉東町で第2ステージの卒業を迎えることが出来ました。主な活動は玉東町役場でのウクライナ避難民の就労支援でした。玉東町が歩む多文化共生への道のりを少しでも一緒に歩むことが出来たことは、幸せに思います。

澤村 啓之

【隊次】2023年度4次隊
【出身】宮城県仙台市
【派遣国】インド
【職種】マーケティング
【活動場所】熊本県玉東町



地元小中学生を対象にした国際交流企画にて異文化理解教育を実施

参加者Voice /

遠野 樋口 紗穂



【隊次】2023年度3次隊
【出身】神奈川県
【派遣国】ミクロネシア
【職種】環境教育

【活動先】農業組合法人 宮守川上流生産組合
岩手県遠野市のいわゆる「ド田舎」、宮守町の農事組合法人で活動しました。農作業や農産物加工場での製造作業など、全てが新鮮で楽しかったです。何より、宮守の皆さんが本当に優しく、明るく、面白い人ばかりで、すぐに大好きになりました。

私の人生史に大きく刻まれた75日間。

協力隊の活動後、必ずまた宮守へ、皆さんに会いに行きたいと、本心でそう思います。「また会いたい」と思える大切な方々とこの宮守でたくさん出会えたこと。これが、私が一番、グローバルプログラムに参加して良かったと思えることです。



遠野祭りにて披露した伝統芸能、神楽



廃棄ビンや葬儀場から大量廃棄されるろうそくを再利用したエコキャンドル

永遠の
日本のふるさと
遠野



永きにわたり地域に根差し、伝承される郷土芸能

参加者Voice /

五城目 平石 守



【隊次】2023年度4次隊
【出身】神奈川県
【派遣国】ボツワナ
【職種】コミュニティ開発

【活動先】一般社団法人 ドチャベンチャーズ
実際の活動は、五城目の小中高生との交流、町の朝市出店、井戸掘り、仮装、森山に登る等様々です。認めてもらいやすい表面的なことをするより、一人ひとりが生き生きと暮らせるためのサポートの大切さを五城目で教えてもらいました。

世界一
子どもが育つまち
五城目



人々の「日常」として現在も愛される五城目朝市

派遣前の貴重な時間、どう過ごすか？ いやいや、絶対グローバルプログラムっしょ！

「誰と、何を、誰のためにするか」、すべてあなた次第です。前を向いて、未来に向かって生きる、思いやりに溢れた町の方々と共に、あなただけの活動が待っています。たった75日間ですが、五城目の方々と一緒に活動を通して、自分自身の成長が体感できるのがグローバルプログラムです。



訪問先の中学校で生徒から素敵なメッセージを頂いている瞬間



町の人が集まり料理やカレーを持ち寄り、特技の茶道でおもてなしたり

参加者Voice / 陸前高田 平沼 里穂子



【隊次】2023年度4次隊
【出身】岩手県
【派遣国】ウガンダ
【職種】コミュニティ開発

【活動先】合同会社ぶらり気仙
東日本大震災から復興し、新たな挑戦を続け、一步一步前進していく陸前高田市。地元の皆さんは、よそ者の私を広田湾のように広い心で受け入れてくれ、奇跡の一本松のような力強さで送り出してくれました。自然、特産品、人の温かさ、すべてがこの地域の魅力です。

地域の課題を「勝手に決めつけない」。

地元・岩手を改めて見つめ直したいと思い希望したグローバルプログラム。活動するにつれて、大好きな地元のはずなのに、知らないことだらけだったと気がきました。現状に対する考え方は人それぞれで、長所と短所は表裏一体。「よそ者」だからこそその視点で、新たな地元の魅力を発見するきっかけになれていたら嬉しいです。



広田湾が育む牡蠣の出荷に向け、ひとつずつ殻を叩いて剥がす作業



地域ブランド米「たかたのゆめ」の魅力化イベント

ノーマライゼーション
という言葉のいらない
まちづくり
陸前高田



大震災からの復興に向けた希望の象徴「奇跡の一本松」

参加者Voice /

釜石 江原 崇裕



【隊次】2024年度1次隊
【出身】島根県
【派遣国】スリランカ
【職種】環境教育

【活動先】一般社団法人 三陸駒舎
岩手県釜石市の中心部から西に約20kmの地、橋野町。古く昔から、馬とともに暮らす生活の根付いたこの地で、ホースセラピーを行う三陸駒舎で活動しました。優しい人、豊かな自然、馬に囲まれたおらかな土地で、気づけば穏やかな心になります。

鉄と魚と
ラグビーのまち
釜石



靑空の下、海と街を見守る釜石大観音

馬と向き合い、自分と向き合う時を過ごす。

グローバルプログラムへの参加を悩んでいる方へ。悩んだ時点で、参加することをお勧めします。活動を通じて、自分の強みや弱みが浮き彫りになり、自分の内面と向き合います。その時が自分を変えるチャンスです。新たな「自分」に出会いに、1歩踏み出しましょう。



根浜レストハウス(釜石DMC)で3.11の追悼の祈りを込めた竹灯籠の制作



ホースセラピーを活用する為に、馬を知る第一歩となる調馬寮(馬の運動)

JICA 海外協力隊について

JICA 海外協力隊の事業概要

JICA 海外協力隊は、独立行政法人国際協力機構(JICA)が実施するボランティア事業です。開発途上国からの要請(ニーズ)にもとづき隊員を派遣し、現地の人々と共に開発途上国の課題解決に取り組むことを目的としています。
活動分野は9分野180以上の職種があり、農林水産、教育、社会福祉、スポーツなど多岐にわたります。
自分の持っている知識や技術、経験を活かせるのがJICA 海外協力隊の特徴です。

JICA
海外協力隊の
活躍分野

計画・行政

国・地域づくりに 関わるシゴト

- コミュニティ開発
- コンピュータ技術
- 行政サービス
- 防災・災害対策 など

農林水産

食べ物や自然に 関わるシゴト

- 野菜栽培
- 家畜飼育
- 食用作物・稲作栽培
- 土壌肥料 など

鉱工業

ものづくりに 関わるシゴト

- 電気・電子機器
- 自動車整備
- 建設機械
- 食品加工
- 金属加工 など

人的資源

教育やスポーツなど 人を育てるシゴト

- 小学校教育
- 各スポーツ職種
- 幼児教育
- PCインストラクター
- 青少年活動
- 日本語教育
- 環境教育
- 体育 など

保健・医療

いのちに 寄り添うシゴト

- 看護師
- 感染症・エイズ対策
- 理学療法士
- 病院運営管理 など

社会福祉

福祉に 関わるシゴト

- ソーシャルワーカー
- 障害児・者支援
- 高齢者介護 など

商業・観光

マーケティングや 観光に関わるシゴト

- 輸出振興
- マーケティング
- 経営管理
- 観光 など

公共・公益事業

生活サービスに 関わるシゴト

- 土木
- 廃棄物処理
- 建築
- 上水道
- 下水道
- 番組制作 など

エネルギー

エネルギーに 関わるシゴト

- ガス・石油・石炭
- 電力
- 再生可能・省エネルギー など

協力隊経験者を応援するJICAの取り組み

JICA 海外協力隊起業支援プロジェクト

JICA 海外協力隊起業支援プロジェクト「BLUE」とは、JICA 海外協力隊員の帰国後の社会還元支援を目的とした起業支援事業です。帰国後に、協力隊で培った経験を活かしビジネスを通して、日本の地域課題を解決し地域経済を活性化することや、海外の社会課題の解決に向けた動きなどが期待されます。

BLUE

JICA 海外協力隊 起業支援プロジェクト

社会起業を促進させる2つのポイント(2024年度)

1 SKILLS 起業伴走プログラム

- ソーシャルビジネスの起業スキル提供
- ビジネスプラン策定
 - メンタリング
 - 起業家講座・講義

2 NETWORKING JICA スタートアップハブ

- ネットワーキングの提供・形成支援
- 交流会イベントの設置
 - 自治体や企業とのマッチング
 - 起業相談会の開催

BLUE



あなたの思い、
今こそ世界を変える
力にしよう。

あの日異国の地で抱いた、「いつか世界を変える力になる」という志。私たちは、JICA 海外協力隊を経て得られた強烈な経験と新しく生まれた価値観にこそ社会の課題を解決するビジネスのアイデアが眠っていると思います。決して簡単ではない世界の、日本の、地域の難題に、挑みたい。利益の追求だけでなく、ビジネスのあり方を共に考えたい。JICA 海外協力隊経験者に「社会起業」という選択肢を。

社会還元表彰

帰国後社会課題の解決に取り組んでいる元協力隊の方を表彰する『帰国隊員還元表彰』。JICA 海外協力隊事業の目的の一つである「ボランティア経験の社会還元」にかかる事例を収集、紹介し、一層の社会還元の機運を高めると共に、より良い社会の実現を目指します。国内外で活躍する元協力隊の事例は右のHPからご覧いただけます。

社会還元表彰の
詳細はこちら



JICA 海外協力隊応援基金

途上国の最前線で活動している隊員、帰国後に国内外で社会課題の解決に取り組んでいる帰国隊員、世界と日本の「かけはし」となるJICA 海外協力隊をご寄付で応援ください。

個人・法人：1口1000円～

1度のお手続きで毎月定期的にご支援いただくことも可能です。遺贈のご相談も受け付けております。

協力隊応援基金



お問合せ先

独立行政法人国際協力機構(JICA) 国内事業部市民参加推進課

〒100-0004 東京都千代田区大手町 1-4-1 竹橋合同ビル Mail:jicata-kifu1@jica.go.jp